



TITLE:

「一言・ふたこと」より

AUTHOR(S):

---

CITATION:

「一言・ふたこと」より. 静脩 1969, 5(6): 3-3

ISSUE DATE:

1969-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36508>

RIGHT:

## 「一言・ふたこと」より

この1年間に「一言・ふたこと」欄に寄せられた、図書館に対する要望、苦情、提案等を整理してみると、ほぼ以下の4項目に大別できる。すなわち、1、図書館におけるサービスの改善——そのためには、利用者側と図書館側のコミュニケーションを徹底すること。2、研究者と学生間の落差の解消——研究者偏重の傾向を是正すること。3、学内協力体制の確立——そのために「全学図書協議会」（仮称）を設置すること。4、資料の充実——そのための図書購入費の増額。

1、の項目については、サービスに携る職員の絶対数が不足している現状の打開が先決問題だが、現在のスタッフでなし得る業務の改善は、早急に着手しなければならない。2、以下の項目については、図書館だけでなく、文部省、大学当局、研究者間の相互の深い理解と協力なしには、どれ一つとしてなし得ない。いずれにせよ大学の中であって、その要求が必ずしも正当に反映されない層の声に、これからも図書館が積極的に応じてゆく姿勢を持たなければならない。大学改革の機運が盛りあがった今、一図書館員としてそのことが痛感される。

(T.S.)

## 図書の時差受入

### ——ラッシュの解消に

1年間に附属図書館に持ち込まれて、整理される図書は、約53,000冊になる。これを月平均すれば、約4,400冊となり、もし図書が各部局から月平均して持ち込まれれば、整理はスムーズにいき、それほど停滞はないものと思われる。しかし、実際は2、3月の年度末に全体の37%（特に3月は普通の月の3倍）の図書がもち込まれ、そのため新年度4月から7月にかけて、3カ月の整理のおくれがあり、これが正常にもどるのは8月から9月上旬になる。これを解消するには、各部局で会計上予算の配分を考え、月平均した支払い、登録が望まれる。

(受入掛より)

## 所在不明図書について

### ——附属図書館書庫掛より

私は附属図書館に勤務する一職員として利用者のかたに常に赤面するような気持ちをもっている。それは図書館としての最小限のサービスさえ充分にできていないのではないかという危ぐなのである。長時間カウンターでお待ちねがったあげく「本が見当りません。」とお帰りをいただく場合が時々ある。これらのかたがたに対して、この紙上を借りて深くおわび申し上げると同時に、事情を説明して改善への決意を申しのべたい。

古い歴史をもつ図書館では、その長い利用期間を通じて、どうしてもある程度の不明本や使用不能の破損本等の発生を免れえない。それはしかたがないのだが、この場合図書館としてはその正確な「不明本リスト」をもつことが不可欠である。もしそうでないと、カードを見て図書を請求する利用者に多大の迷惑をかけることになるからである。遺憾ながら附属図書館では昭和32年の「物品管理法」施行直前に作成した「不明本リスト」をもってはいるが、それ以後現在までの期間には徹底した不明本調査が行なわれていない。したがって、この間に所在が不明になった図書についての完備したリストがない。何故徹底した不明本調査が行なわれなかったのか？それにはいろいろな理由があるが、先づご多分にもれず人手不足に問題がある。428,030冊（昭和43年3月現在）の蔵書を保管する書庫掛員は2名であり、不明本調査以外の日常業務に追われがちである。次にあい路となっているのは、図書が第1・